進命婦、清水寺へ参る事［宇治拾遺物語巻四・第六〇］

今は昔、進命婦若かりける時、常に清水へ参りける間、師の僧きよかりけり。八〇のもの也。法華経を八萬四千余り読み奉りたる者也。此の女房をみて、欲心をおこして、たちまちにやまひに成りて、すでに死なんとするあひだ、弟子どもあやしみをなして、問ひていはく、「このやまひのありさま、うち任せたることにあらず。おぼしめすことあるか。仰せられずはよしなき事也」といふ。この時、かたりていはく、「誠は、京より御堂へ参らるゝ女に、近づきなりて、物を申さばやとおもひしより、此の三か年、不食のやまひになりて、今はすでに蛇道におちなんずる、心うきことなり」といふ。

こゝに弟子一人、進命婦のもとへ行きて、このことをいふ時に、女、程なく来たれり。病者頭も剃らで年月を送りたるあひだ、鬚、髪、銀の針をたてたるやうにて、鬼のごとし。されども、此の女、おそるゝけしきなくして、いふやう、「としごろたのみたてまつる心ざし浅からず。何事にさぶらふとも、いかでか仰せられんこと、そむき奉らん。御身くづほれさせ給はざりしさきに、などかおほせられざりし」といふときに、この僧、かきおこされて、念珠をとりて、押しもみて言ふやう、「うれしくきたらせ給ひたり。八萬余部よみ奉りたる法華経の最第一の文をば、御前に奉る。俗を生ませ給はば、関白、摂政を生ませ給へ。女を生ませ給はば、女御、后を生ませ給へ。僧を生ませ給はば、法務の大僧正を生ませ給へ」といひ終りて、すなはち死にぬ。

其の後、女、宇治殿に思はれ参らせて、はたして、京極大殿、四條宮、三井の覺園座主をうみ奉れりとぞ。

問、各会話を訳せ